

日本戦闘の者



荒谷 卓 (あらや たかし)
 生年月日：昭和34年秋田県出身
 略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
 平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
 平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
 著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房 / 『自分を強くする動かない力』三笠書房
 熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
 代表：荒谷 卓



9月12日から26日まで、ロシアのクリミアとモスクワに行ってきたので、今回から3回に分けて、そのことについて話をしますよ。

今の日本では、ロシアに行ってきたというだけで大騒ぎで、ましてやクリミアに行ってきたという、「どうやって行ったんですか?」「よく無事に戻れましたね?」なんてゆう質問が来る。心根の腐った奴に至っては「ロシアから何かもらったのか?」等と自分の無知を省みず無礼なことを言うから本当に困ったもんだ。クリミアには、誰でも普通に観光で行けるよ。日本の外務省は渡航規制をかけたり、税関もロシアへ行くというだけで嫌がらせをしたりしているが、ロシア側は日本人に対して一切の規制もかけてないし、親切に対応してくれている。

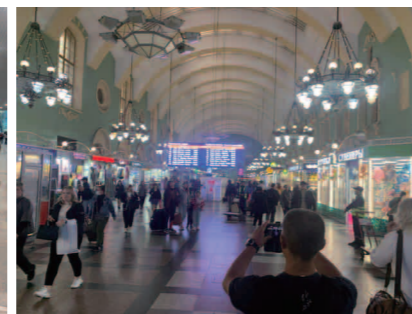
先回の記事で「情報」について話した通り、真実を知りたいければ、実際に自分の目で見て判断しなくてはだめだ。実際に見聞きできないのであれば、少なくとも対立する両者の意見と根拠としている情報の信頼性と正確性を自分で調べるのが筋だ。今の日本では、強烈な情報統制がかかっており、政府もメディアも英米の見方の情報しか流さないから、日本国民は正しい情勢の見方が出来ない。そうした偏向情報だからこそ、俺が現地で見聞きしてきた情報と比べて考えてもらいたい。

今回、ロシアを訪問するに至った経緯は、ロシアにいる俺の武道の弟子達からの要請があったからだ。俺が明治神宮武道場至誠館の館長をしていた頃、欧米諸国だけでなく、ロシアにおいても日本武道に関心を持つ道場に声をかけ、「至誠館武道共同体」という団体を創った。少し遅れて、モスクワ大学にも日本武道クラブを創った。そして、10年間毎年、欧米とロシアに出向いて指導を続けていた。5年前に「熊野飛鳥むすびの里」を創設するため、至誠

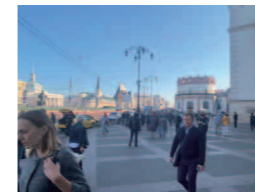
館館長を辞し、その後、コロナ騒動もあったため海外へは全く行かなくなった。ようやく、日本もコロナ騒動が落ち着いてきたところで、ロシアの弟子達から「是非、またロシアに来て武道を指導してください」との要請を受け、半年間考えた末、引き受けることとした。今回の武道講習会の開催地はモスクワに決まった。すると、今回モスクワの講習会には参加できないというクリミアで武道場を運営するアンドレイ(愛称サーシャ)さんから、「是非クリミアを案内したいから観光に来てくれ」との誘いがあった。サーシャさんは、オデッサ生まれ、ドンバス大学で地質工学の博士号を取ったウクライナ人である。14年前から、彼と彼の奥さんのライフ・ワークであるクリミア南部にある古代山地の地質調査のため、ゲネラリスコエという小さな村に自分で建てたという家に家族4人で暮らしている。昨年末にこの誘いを受けたとき、俺としては、この時期にクリミアに行けるのは嬉しかったが、クリミア大橋が爆破されたという報道が直前(2022年10月)にあったばかりだったので「今、クリミアへは観光で行けるのか?」と質問した。すると「何のことですか? クリミアは観光で賑わってますよ。特に夏は観光客でたいへん込むので避けたほうがいいです」との答えだった。そこで俺が、「クリミア大橋がウクライナの攻撃を受けて破壊されたというニュースを聞いたが?」と問い直すと、「あれはウクライナのナチストの悪質ないたずらですね。全く問題はありません。鉄道は通常通りクリミア橋を通して運行してますし、車でも、ドンバス経由で来れば大丈夫です。」とのこと。「では、よろしく」と頼むと、「はい。楽しみにお待ちしてます」とのやり取りがあった。クリミア行きが決定した。その後数回のズームでの打ち合わせでも、「先生、観光は海がいいですか山がいいですか? 歴史遺跡がいいですか自然がいいですか? 1週間滞在してくればクリミアを1周して案内できますよ」等とにか



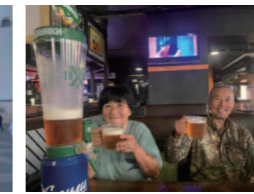
モスクワ空港内の写真。



モスクワ鉄道駅構内の写真。



モスクワ市内の風景。



モスクワ市内の食堂でビール一杯。



クリミア行き電車との写真。



クリミア行き寝台電車の内部の写真。

く、「あれも見せたい。ここにも行ってもらいたい」と観光メニューの組み立てに一生懸命の

様子だった。そうした彼の対応からは、紛争の「ふ」の字も窺えなかった。俺としては、折角だから実際の紛争の場面に遭遇できるたらいいなと期待していたので、やや拍子抜けだった。

こんな感じのやり取りがあって、こちらも8月末に稲刈りがあるので、サーシャさんの言う通り観光客が多い夏は避けて9月中旬～下旬のロシア訪問となった。ロシア訪問の全般日程は次の通りであった

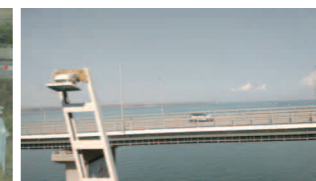
- 12日 関空～ドバイ
- 13日 ドバイ～モスクワ
- 14日 モスクワ～(鉄道)
- 15日 ～(クリミア) シンフェロポリ～(車) ゲネラリスコエ
- 16日 ヤルタ周辺観光
- 17日 スダク周辺観光
- 18日 クリミア山地観光
- 19日 ゲネラリスコエ～シンフェロポリ～(鉄道)
- 20日 ～モスクワ
- 21日 モスクワ～モスクワ郊外(トロピカル・パーク)
- 22日 武道講習会
- 23日 武道講習会
- 24日 武道講習会
- 25日 モスクワ～ドバイ



クリミア行き電車の途中休憩間の写真。



クリミア大橋自動車道を渡るため



クリミア大橋の写真。



対空電子戦システム、クラスハ-4。写真はウイキペディアより。

26日 ドバイ～関空

日本が一方向的にかけたロシアに対する経済制裁で、日本とロシアの直行便がなくなったためドバイ経由の航路となった。コロナ禍で上がった航空運賃がそのまま、更には、円の値打ちが下がってしまい、5年前まではルーブル(ロシアの通貨)より円が強かったはずなのに、今の円はルーブルの約半値しかない。結局、5年前に比べると3倍以上の航空運賃、時間も2倍かけてのロシア行きとなった。

モスクワについて翌日、鉄道でクリミアに向かう。ロシア・ウクライナ国境上空は、ロシア軍が完全に支配しているが、空域統制がかかっているのが民間航空機は飛行できず、モスクワ～シンフェロポリ(クリミア)間は鉄道で片道1,800km36時間の旅となった。私を含め同行の日本人4人は、誰もロシア語が話せないで、招待してくれた武道団体の代表スラブさんとモスクワの道場長ヴァシリイさんがクリミア迄同行してくれた。二人は、長い寝台列車の旅に備え、酒とつまみをどっさり買い込んできてくれた。ロシアの列車の旅はのんびりしている。途中の停車時間は40分のところもあり、ゆっくりと駅近のスーパーに酒と食い物の調達に行ける。おかげで、ウォッカを飲みながら列車の旅ができた。同じ列車には、軍人も何人か乗っていた。直接は質問できないので、同行のヴァシリイさんに「彼はどういう理由でこの列車に乗っているのか?」と聞いてもらうと、「クリミアに勤務しているが、休暇で家に帰っていた」とのこと。軍人の彼は、同じ車両に乗っていた子供たちと列車

の通路でサッカーをして時間を潰していた。全く緊張観は感じ取れなかった。そもそもロシア人は愛国心が強く、今回のウクライナとの紛争では入隊志願者が殺到したため、希望してもなかなか入隊できない状況だという。また、一般のロシア人はあまり政治に関心を持たないのだが、5年前はどちらかというとプーチンに批判的だった武道家の知人でさえ、今は「彼はよくやっている」とプーチン大統領を支持していた。すべてが日本の報道ぶりとは全く逆である。

ロシア南部の地平線まで広がる広大な農地を見ながら、我々の列車はいよいよクリミア大橋を渡り始めた。とても長い橋なので、列車で渡るのに20分近くかかる。鉄道の橋の横に自動車の橋が並んではいっているので、昨年、ウクライナの攻撃を受け爆破された個所が確認できたが、完全に修復が終わり、橋は通常通り車が走っていた。クリミア大橋に近づいた辺りから、GPSが全く効かなくなった。ミサイルやドローンの攻撃に対して電子線のバリアーを張っているからだろう。ロシアの対空電子戦システムは強固で、例えば、AWACSの電子妨害目的としているクラスハ-2は、最大250kmの範囲でレーダー誘導ミサイルなど他の空中飛翔体のターゲティングの妨害も可能である。クラスハ-4は、広帯域多機能妨害局で、クラスハ-2と同様にAWACSや他の空中レーダーシステムに対抗する他、低軌道衛星の妨害に有効な範囲を持ち、標的の無線電子機器に永続的な障害を与えられる。地上ベースのレーダーもまた、クラスハ-4の実行可能な標的である。このような電子戦システムに一度妨害されたミサイルやドローンは、元の目標から離れた偽の標的を狙い、もはや脅威ではなくなる。モスクワのタクシー運電手も「最近ナビが使えなくて困る」と言っていたが、ウクライナがドローンの標的にする大都市や重要拠点は、すべてこの対空電子戦システムによって守られている。